



風邪・感冒・インフルエンザ

平井信義

昭和卅二年は、感冒の当り年でありました。感冒にかからないものは人間でないというほどに、学童にもおとなにも、幼児たちにも襲いかかりました。五月と十一月と二つの山をなして大流行になり、十一月の時は肺炎や心臓衰弱を併発して死亡する者さえも出る有様でした。

大流行といっても、人のまねをして感冒にかかるわけではありません。病原体が患者から他の人たちに伝染して、鼠算式以上にその数を増していくのであります。日本だけでなく、世界的な大流行になつていて、飛行機の発達した今日、流行の速度も増していると言えましょう。大正七・八年の大流行のときは、フランス戦線（第一次世界大戦）の一兵士に始まったと言われますが、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、そしてアジアと四界をなめ尽したのであります。

す。今度の感冒は、「アジアかぜ」とも呼ばれているように、アジアから発生していることは、もうご存じのことと思います。

感冒とインフルエンザとどこがちがうのかと質問されたことがあります。これは同じものであります。感冒はインフルエンザ・ウイルスというばい菌によつて起ります。ウイルスというのは、普通の顕微鏡では見えないほどの小さなばい菌につけた総称でありますから、麻疹、脊髓小児麻痺、その他沢山のものがこのウイルス族に属します。感冒には感冒独特のウイルスがあるわけですが、感冒のウイルスでさえ、A、A'、B、Cの四種類について、現在はつきりしたことがわかっていますが、この他にまだまだ沢山あるようです。今回流行したウイルスは、「東京A57」と名づけられたことは皆さまご存じのことと思います。すなわちA型に属する

もので、もとのA型とは若干性質が異つていと言われ、東京とか57とかがつけられたのも、その為であります。

感冒の診断には、ハーストの検査が用いられます。これは、感冒のウイルスが、人間の赤血球を凝集させる性質があるのを利用して考え出されたものなのです。感冒にかかると、人間の体内にはウイルスに対する「抗体」というものが出来ます。この抗体が血液の中にあると、赤血球は凝集されないので、この性質を利用して、人間の血清の中に出て来た抗体の量を調べようというわけです。

ことに、感冒の回復期の子どもには、抗体がふえているものですから、病気の初めの抗体の量と、回復期の抗体の量とを比較すれば、感冒にかかったかどうか、はっきりするのです。

この方法で調べてみると、年齢の少ないものほど、抗体が少ないことがわかりました。

しかし、実際の臨床には一人ひとりの子どもにハーストの検査をおこなうわけにはいきません。そこで臨床的な症状から、感冒か風邪か、その他の病気を判断するより他はないのです。

では、感冒に特有な症状にはどんなものがあるでしょうか。

急に寒けがしてきます。そして高い熱が出ます。高い熱はしばしば四〇度に及びますが、熱の山が二つ出来るのが、特徴とされています。

ます。すなわち、一度出た熱が下ったかと思うと、再び上昇してから下るのです。その間、のどが痛み、咳が出てからだがだるくなりますが、腰が痛かったり関節が痛んだりします。はなはだしい時には、ひきつけたり、もうろうとしたり、脳症状を呈することもあります。しかし、普通は三―五日の経過で、次第にもとに戻るものです。

そのような症状ならば、普通の風邪と大体同じではないではないかと訝しく思う方がありましょう。確かに、風邪との区別は、症状の上からではつき難いことが多いのです。発病の仕方を見ると、風邪の方は徐々に起るといわれますが、それは実際にはたいした目安になりません。比較的目立つちがいは、熱の山が二つにならないという点かも知れません。ところが、感冒でも、熱の山が二つにならないものが相当ありますし、風邪でも熱に二つの山が出来る場合もあるのです。

実は、風邪という病気は、まことにあいまいな病気であります。風邪かと思つてみると、脊髓小児麻痺が現れてきたり、伝染病の初期症状であつたり、異型性肺炎であつたり、あるいは結核が頭をもたげてきたりすることは平生よく起ることあります。これを「仮面としての風邪」と呼んでいます。

それのみでなく、軽い風邪にかかっているはずのおとなの人からその風邪をもらった乳児や幼児が、感冒に特有のはげしい症状を現わすことがたびたびあるのです。同じウイルスであっても、年齢によってこのように症状がちがうわけは、おとなには多少とも感冒に対する免疫体があるからでありましょう。逆に、幼児の感冒をうつされたおとなが、軽い風邪で終ってしまうこともあるのです。しかも、風邪と診断を下された患者の中にも、よく調べてみると、感冒のウイルスが発見されるといふ研究もある位であります。

いづれにしても、いろいろな伝染病の初期症状、すなわち「仮面としての風邪」、あるいは非常に軽い伝染病（これを流産型の伝染病といえます）を除いてみても、いわゆる「風邪」があるのです。それは、まだ病原体がはっきりしていないウイルスが原因となっていて、まだ考えられているものなのです。風邪のウイルスの研究が進めば今後ぞくぞくと正体ははっきりしてきましよう。ただし寒さにあたってストレスが起り、それによって粘膜の分泌が高まって鼻水・咳になるものもあることは認められています。その際にばい菌が繁殖し易くなるのも事実です。しかし、大部分の風邪は、不明のウイルスの伝染から起るものと考えられています。

風邪・感冒の症状は、発熱、くしゃみ、咳の他に嘔吐、下痢など消化器の病気の姿で現れることさえありますし、発疹を見たり、

あるいは脳炎のような状態を呈するものがあるので、なかなか診断はむずかしいわけです。よく医者は、かんとんに「風邪です」と診断をしますが、風邪の診断は最もむずかしいものの一つです。

風邪の大部に、そして感冒は、ウイルスによって起ることを分っていただけだと思いますが、これらのウイルスは、咳・くしゃみなどの飛沫の中にひそんでいて、他人にうつります。あるいは、大きな声で話しをしても、小さな水滴が口から飛びますから、それが他人の鼻・喉につくと、病気を起させます。一米以内が一番危険です。

ですから、病人の傍へいかなないことが、風邪・感冒から身を守る大切なことであります。ところが、病人がうろうろと出歩いていることがしばしばです。軽い風邪の人です。軽い風邪の人は、仕事があれば平気で出歩きます。ことにおとなの中には、そういう人が多いのです。ですから、子どもを人混みの中に連れていくことは、非常に危険なことと言えます。

幼稚園・学校などのような子ども集団にも、ひとり、軽い風邪の子どもが来ると、たちまち他の子どもに拡がる危険があることはすでに経験されているでしょう。ですから、ひとり・ふたりの子どもが感冒で休み始めたら、ことに昨年の流行時などには、学校・幼稚園を一時休みにすることが大切です。ですから、少し位の風邪

で、学校・幼稚園を休んではいけないなど言うのはたいへん不道徳な話です。

どうしても人混みに外出をしなければならぬ場合には、マスクをして予防する必要があります。ただし、マスクはガーゼを八枚重ね、新しいものであること。それは、不用意に咳やくしゃみを他人にかける人があるからです。人混みに出たあとは、ただちにうがいとさせることはばい菌を洗い流す意味でも効果があります。

予防注射も効果がありますが、感冒が東京A57によって流行している場合には、そのウィルスの感染に対して効果があるにすぎませんから、他の型のウィルスに脅されたときには効き目がありません。また、どの位の効果があるかについても、いろいろ議論のあるところで、今後ますますよい予防注射が工夫されることを期待しましょう。

風邪・感冒に特効の薬はありません。熱が高い時は下熱剤に強心剤を混ぜて処方します。子どもの場合は、安静の意味も含めて、鎮静剤をういます。熱で痙攣を起しやすい子どもにとくに効果があります。何よりも安静が必要です。暖かくしてよく寝ること。これが、感冒にうち克つ力を、患者自身の中に養うことになるのです。ですから、風邪薬をのみながら出歩くことは、公衆道徳を乱すこと

になるばかりでなく、本人のからだにもよくないことです。

子どもはとくに、風邪・感冒から気管支炎、気管支炎から肺炎になりやすいのです。風邪・感冒のウィルスが肺炎を起すではありませんが、このウィルスによって弱くなった呼吸器道が、他のばい菌の繁殖に都合よくなるからであると考えられています。どのような筋道で、中耳炎や急性腎臓炎も起ると考えられています。

風邪・感冒といっても、少し詳しく追究してみると、科学のメスの及んでいない点がいろいろあることがわかりでしょう。風邪の研究者たちは、その謎を解くために日夜努力をしているのです。むしろ、風邪というものは病気の幽霊と言ってもよいでしょう。その正体は、今後の研究によってはつきりしてくると思います。

* * * * *